

アルコール依存の兆候を見逃さないで

I . I

娘・奏子（かなこ・当時3歳7ヶ月）、周子（ちかこ・同1歳11ヶ月）を亡くした事故から、あと少しで丸13年になります。平成11年11月28日、私たち家族4人の乗った車は箱根への1泊旅行の帰りに、東京都世田谷区の東名高速道路で、酒酔い運転の大型トラックに追突され炎上し、娘二人の命が奪われました。トラックを運転していた職業運転手は、前日の夜、フェリーの中でウイスキーを寝酒として飲み、さらに事故当日の昼食休憩を取ったサービスエリアでも、缶入り焼酎飲料1本と残っていたウイスキー（約280ミリリットル）を飲み干しました。そして、わずか1時間の仮眠を取った後に再びハンドルを握り、高速道路を走り出したのでした。東名高速道路の広い3車線を全部使うような蛇行運転を繰り返し、11人ものドライバーが「あのトラックは危ない」という通報を寄せたものの、誰も暴走トラックを止めることができず、私たちの乗用車に襲いかかってやっと止まりました。ろれつが回らず、ふらふらしている運転手の姿が、偶然テレビカメラの映像に残されていました。

当初、運転手本人の当日の行動や判断に対して多くの疑問が沸きました。どうしてよりもよって、職業運転手が飲酒の上で車を運転するという暴挙に出たのだろうか？ どうして酒瓶を車内に持ち込んでいたのだろうか？と。

刑事裁判が始まると、運転手は事故当日に初めて飲酒運転をしたのではな

く、過去十数年にわたって飲酒運転を繰り返していた常習者であり、事故の数年前からは昼間も飲酒をするようになっていたことが判りました。謎はますます深まるばかりでした。それほど繰り返し飲酒運転をしていたのなら、なぜ家族や職場の人は気が付かなかっただろうか？体を壊し、入院までして、医師から「もう酒はやめるように」と言われてもなお、酒をやめられなかったのはどうして？と。

やがて私たちは、「アルコール依存症」という病気のことを知ることになります。酒を飲むこと自体をコントロールできなくなってしまう病気であり、個人の意志の弱さやモラルの低さとは関係がないこと。だらしのない人よりもきまじめな人が陥ることの多い病気であり、酒を飲める人なら誰でもこの病気にかかる可能性があること。「否認の病気」とも言われるほど、依存症に陥っていることを本人が認めることはまずなく、それゆえに専門医療を受診する人も極めて少ないこと。重症になると酒を飲まないで不快な症状を呈してしまうために、あらゆる手立てを用いて酒が切れないようにしてしまうこと・・・。

この病気のことを知ってから、トラック運転手に対する疑問の多くが解けました。事故当日、何がきっかけで彼は大量の酒を飲んでしまったのかを追究しても意味はなく、飲む理由やきっかけは何でも良かったのでした。むしろ私たちが目を向けるようになったのは、どうしてここまで重症になっている依存症者が放置されてしまっていたのだろう、ということでした。職場の

上司や同僚、家族といった周りの人に、もう少しアルコール依存症という病気の知識があったのなら、彼の異常な行動、病気の兆候に早めに気が付いて、死亡事故という最悪の結果を招いてしまう前に彼を回復させる手立てを取ることができたのではないかと強く思うようになりました。そして、それを敷衍^{ふえん}すれば、日本に440万人もいると言われているアルコール依存症者とその予備軍についても、そのほとんどが介入してもらおうこともなく、飲酒も飲酒運転もコントロールできていないのではないかと思います。

アルコールについての正しい知識を広く一般の人が持ち、さらに飲酒運転の違反者に対しては、依存症についても学ぶ機会が確実に提供されれば、娘たちのような犠牲者が確実に減っていくものと信じています。